

17

行 龜
 著 谷
 和 漢
 續 書
 四

K110.1
 37
 4

和漢脩身訓卷四

第一章

龜谷行著

○人行義を脩め。生産を治め。身體を保つ。此、三の者ハ。人道の立つゆゑ也。最先づ講求せざる處うら

べ。伊藤東涯語
東涯漫筆

○富貴を欲して。貧賤を惡むハ。人の恒情あり。全く非ふりと為るべし。只富貴を豔して。貧賤を嗟らば。爵禄を重んじて。道義を蔑せらる。正ふ是俗人あり。同上

○易小曰く。天道ハ満るを虧くと。又古語小曰く。多く藏むまば厚く

失ふと。多く財を聚めて。人の貧苦を救はざれば。必其財を失ふよ。至

る。貝原益軒
語家道訓

○凡事を作せよ。始を謹之。終を慮まば。過寡く悔少し。故小事を作せよ。先思ふ。思まば。輕率よ事を作せば。必過あり。過てば。必悔あ

り。貝原益軒語
初學知要

第二章

○凡、百事の成るや。必^ス之を敬^スする
 ふ在り。其敗るゝや。必^ス之を慢^ルるゝ
 あり。故^ニ敬^ス怠^ル勝^テバ吉^{アリ}あり。怠^ル
 敬^ス勝^テバ凶^{アリ}あり。荀子
 ○戰戰慄慄として。日^ハ一日を慎

む。人。山^ハ又つまづく無^クして。堦^ハ小
 蹟^ク也。故^ニ人^ト小^ハ害^ヲを輕^ト。微
 事^ヲをあ^ハど^リ。以^テ悔^ハお^ハず[。]淮南子
人間訓

引堯
戒

○吾^レ未^ダ財^ヲ又^テ蓄^ムふ[。]能^ク善^ヲを為^ス
 是^レ者^ヲを見^ズ。吾^レ未^ダ誠^ヲあら^ズして。能^ク
 善^ヲを為^ス是^レ者^ヲを見^ズあり。程子
語

○善を為^スハ。重を負て。山よ登る。如^シ。志已ふ。力お及ぶ。ざるを恐る。惡を為^スハ。駿馬よ乗て。坂を下る。如^シ。鞭策を加へ。とも。足亦止む。と能^ハズ。者心雜言

○力餘あまむ好事を行ひ。力足らざまば好心を存^スズ。力足らざ^レて。

勉めて好事を行ふ。真小是好事あり。力餘ありて。徒らよ好心を存^スズ。ハ。好いと謂まざる也。習是編

○宋の邵康節。其子伯温小告て曰く。汝固より當^ヤ小善を為^スズ。亦須らく力を量り。以て之を為^スズ。一も一力を量らざまば善と雖も。

亦為す處くらび。畜德錄

○人の我よ負くを以て善を為は
の心を墮れと勿き其徳を施せ
よ當りてたゞ自ら我心の忍びざ
る所を行ふのみ未嘗て報を責め
ざる也。縦ひよくらざる者小遇ふ
も只一笑小付せよ。金言

○家よ居り身を立つる最奇を好
むづららび人よく倫常小於て缺
るおとある。起居動作家を治め人
を待つ。事事矩度小合つ。便是君
子の人。豈よ別よ奇を尋ね怪を求
む。處らんや。清張敦復語
聰齋訓語

第三章

○仲由ハ過を聞くことを喜び。今名窮りあふ。今人過あきば。人の規をこととを喜むべ。疾を護して醫を忌むが如し。寧其身を滅せとも。悟ることあり。周子語

○耳中。常々耳は逆ふの言を聞き。心中。常々心は拂る此事あり。纔々

是徳又進と行を修むるの砥石なり。若言言。耳を悦む。事事。心を快くせむ。便此生を把て。鳩毒の中へ埋むるあり。菜根談

○道徳ある者ハ。必多言せず。信義ある者ハ。必多言せず。才謀ある者ハ。必多言せず。唯夫の細人狂人妄

人乃多言チをるト。

明蔡虛齋語
劉氏人譜

○人口を開キけバ。皆能く禮義を談

ト。名節を論ず。利を見るコふ及テハ。

必ス趨リ。勢を見てハ。必ス附ク。又禮義

名節の何物たるを知らズる也。明薛敬軒

語畜
德録

○人を譽メるの言ハ。太タ溢ルるハ。知らズる

べ。人ヲ責ムむるの言ハ。太タ盡スむべシ。
らバ。一時意を暢チなシと雖も。日後
亦悔心ス。含蓄の妙。知らズるべシ。

うラば。知世
事

○人の誇リ果シて實ヲあらバ。深く自
ら悔責スむべシ。躬ニ省ミて。愧ズる
こと無クんバ。只シ之ヲを聽クるノこと。

前人云ふ。何を以て諂を止めん。曰く。辯むること無し。辯むるふと。愈力むまば諂ふること愈巧ありと。金言
○人の常情。多く己が能ふ矜り。多く人の過を言ふ。君子ハ然らぬ。人の善を揚げて。己が善と矜らぬ。人其過をゆるして。己が過をゆるは

ぬ。明太祖語
劉氏人譜

○君子小二の耻あり。能むる所よ矜る耻あり。能せざる所を飾る耻あり。能むまば。謙して以て之よ居り。能せざれば。學びて以て之を充つ。明陳幾亭
語畜徳録
○自ら謙むまば。人愈服し。自ら誇

まへ。人必^ス疑ふ。我^レ恭
ふまへ。以て人の怒
氣を平^カよま^シな^ク。我^レ
貪^ホれば。必^ス人の争端
を啓く。残致^ス。是皆
我^レふ存する者あり。

金言



周濂溪先生

第四章

○君子の學へ。あ^らば日^々新^し
り。日^々新^しある者へ。日^々進^む。日^々
新^しあら^ばる者へ。必^ス日^々退^く。いま
進^まば^らずして。退^うざる者へ。有^ら
ざる也。程子語
○日^々新^しよ^まる者へ。一^日を

一日の工夫あり。一歳ハ。三百六十
日の工夫あり。若積て十年又至ら
バ。其長進ある所。測る處うらげ。故
よ學者ハ。日日と新とふするを貴

ふ。貝原益
軒語

○學ハ思しく原げくと雖も。間思雜慮。
甚心術又害あり。學者胸中をして

泰然事無ら志め。以て有用の思慮
應接を待つ處し。同上

○輕惰二の者ハ。學を為すの大病
あり。輕き者ハ。未得ざるを以て。既
よ得ると為し。惰る者ハ。悠緩ふ
て進むこと能はげ。張子曰く。輕ま
を矯め。惰るを敬むと。同上

○學者へ固より當ふ勉強して。懈らざる。強く。又須らく心志を寛舒よし。精神を愛養をべし。此の如く。ふき。局促の態。ふく。從容の象あり。二ツの者並び行をき。相悖らざるべし。同上

○均く是人あり。游惰ふき。弱ふ

り。一旦困苦をれば。強とふる。意よ。慍へば。柔ふり。一旦激發をき。剛とふる。氣質の變化をること。此の如し。佐藤一齋語

第五章

○今の人。恩惠を受けて。多く記省せぬ。人よ。惠む所あれば。微物と

雖も亦歴歴心こころに在り。古人言ふ人
小施せしてハ念ねんふ勿なき施せを受けて
ハ忘わするる勿なれと。表氏世範

○患難顛沛ハ人の時ときに有る所ところ
り。偶ぐう一ひととび之これ小遇せうごハ或あるハ一言ひとことを
以もつて其その冤抑えんおつを伸のべ或あるハ百方ひゃくほうして
其顛連せんとれんを濟たすふ崔子曰さいこくく惠めぐみハ大おほか

る小在せうざいらば人の急いそを救たすふ小在せうざいり

と。易知編引
袁了九語

○凡およ族衆しゆしゆ假貸かりかひする所ところあらば吾われカ
量りやうの厚薄こうはくに隨したがひ之これを與あたふ必かなら志こころも
還かへせと言いむば縱たとひ其欲そのよく小満せうまんにせ
して之これを怨うらむるも亦また償かへを責とがむる
時ときの甚こまよ至いたらば習是編

第六卷

○君子の交^りや道義を以て合ひ。志氣を以て親^む。淡きこと水の如し。故^に又能く久し。小人の交^りや。勢利を以て結び。酒食を以て親^む。甘きこと醴の如し。故^に又怨^む易^し。習是編
○己を待^つ者。當^ら不過^ち。チ中より。

過あるを求む。獨^り徳小進む。此^れとあ^らば。ま^じ患を免^る。人を待^つ者。當^ら過ある中より。過^ちふきを求む。盈^す。但^し厚^き。残^る。此^れと又非^ば。亦^た怨^むを解^く。盈^す。願體集
○世間往^つ處として。意^を拂^る事。か^まい無^し。一^日として。意^を拂^る事。

あまの無し。唯度量寛弘かれば受
用の處あり。彼局量褊淺なる者。空
く自ら懊恨するのこ。明呂叔簡語
呻吟語

○人剛を好めば我柔を以て之小
勝ち。人術を用ゐるを我誠を以て
之を感ず。人氣を使へば我理を以
て之を屈す。天下處し難き事不

し。瑜紳

○人の微賤お於る。皆當小誠敬を
以て。之を待つ。急し。忽せし。慢る
づ。のらげ。明薛文
清語

○子弟僮僕人とあひ争ふ者あま
ば。只自ら戒飭を行ふ。急し。怒を別
人よ加ふべし。履ず。金
言

○盛怒の時よ於て堅く忍びて動
うず。心平ふるを俟ち。審ふして之
小應必庶幾とい失ふ。明許平
仲語

○盛怒の時よ方り。慎て妄又簡を
與へ言を發むること勿き。之を妄
よとせむ。必は悔あり。貝原益
軒語

○君子の人小接る。禮讓を以て此

故よ争ふ所ふ。夫の才能を争ひ。
功業を争ひ。權力を争ひ。意氣を争
ふ。皆小人の為也。所禮讓の道よ非
也。且禍を取るの道あり。同上
○人と交る。人の財を費さす。己
を費さうらんことを欲せば。人の

未済作身言 卷四 六月不辨本

費を以て我う樂と成るるなり。賤むべし。凡此等の事ハ心術を完うせ

厩し。具原家道訓

○少く才ある者ハ。徃徃好て人を輕侮し。人を調笑以失徳と謂ふ厩し。侮を受る者。徒らよ己まに必を憾て之を諧る。即自ら諧るなり。

佐藤一齋語

○事を人よ問ふハ。虚懷を要し。毫も挾せし所ある厩うらば。人よ替て事を處するハ。周匝を要し。稍缺く所ある厩うら



薛叔軒先生

口業斎身言 卷四 十六 己風士成友

に。同上

○遠路に書札を寄せるに。當に前夜に於て。之を成を急し。發せるに臨て。匆匆之を成せば。必に遺漏多し。金言

第七章

○書を讀むに。家を起すに本。禮小

循ふに。家を保つに本。勤儉に。家を治むるに本。和順に。家を齊ふるに本あり。朱子語

○往來禮儀に。家の貧富を量り。以て豊儉を為し。俗に隨ひて。妄りを行ふ急うらば。人生必讀書

○早く眠り。早く起き。勤めて家務

を理め。衣食を節省し。毎歳餘を留めて。以て日後吉凶の大事に備ふ。
同上

○貧富俱に勤儉の二字を。欠乏の
らび。勤に孜孜利を為さず。非也。唯
力を竭して。經營する小在り。儉は
鄙吝堪へざる小非也。只是入を量

りて出たことを為さる。習是編

○衣食住の三は者。我分より輕
くせべし。自ら我に適當せりと思
ふ。既不分に過ぎざるあり。只親
を養ふ。本に報ざるの道あり。我
分を忘きて。財を惜む。慮らば。又
人を救助する。分は隨ひ。力を盡

を_カ盡し。是人を恤み。人_ニ交る此道
あり。貝原益軒語

○後事を慮らざる人ハ。酒食を豊
みし。屋宅を羨よし。衣服を飾りて。
費を惜まば。財盡れば。人_ニ借るこ
とを憂へば。借る所の財ハ。利息加
わり。彌_カ借りて彌_カ不足し。遂_ニ家を

破るよ至る。故_ニ初より慮り。以て
後日の計を為_スを_カ盡し。同上

○人の書を借らば。我_ガ書を閣き。先
づ其書を読_ミ畢り。之を返_スを_カ盡し。
速_ニのよ返せば。人も亦貸_スことを
惜まば。書を人_ニ貸さば。我_ガ用缺く
ることあり。是を以て自ら省_ミ借

くる物ハ。久く留め置く處うらば。

上同

○人の書を借らば。汗損せべら
ば。屋漏烟煤。油膩猫鼠盗火等の防
ぎを為さるべし。借くる書ハ。筐笥よ
置き。見る時よ方りて。之を出さべ
し。若し汗損せば。補繕して其過を謝

し。之を返さべし。同上

○門戸火燭ハ。吉凶諸事小遇ハ。身
體疲ると雖も。睡小臨むの時。必
須らく點檢を盡し。人生必
讀書

仙洲島田均書



和漢脩身訓卷四終

明治十五年三月廿八日版權免許
 同 年 五月卅一日出版
 同 年 九月十八日再版御届
 同 十七年七月七日三版御届

定價金七錢五厘

東京府士族

光風社長

著者出版人

龜谷

行

東京神田金澤町十番地

大阪備後町甲目十番番地

中近堂支店

同 備後町甲目十番番地

梅原龜七

製本

發兌

稟准

東京光風社

明治十四年之冬以
復製本以此紙為証



179

龜谷
行著

和漢脩身訓

再版

五

K110.1
37
5